特別寄稿

助産師は賢い女

作家・精神科医
なだいなだ

フランス語で助産師のことを「sage femme」サージュ　ファンムといいます。

サージュとは，賢いという意味で，賢人もサージュです。もともとは助産婦が，お産の知識と経験を持った賢い女であるところからつけられた名前です。十三世紀にすでにこの言葉ができていましたから，当初から，職業として確立していたのでしょう。

当時のフランスは，医者にかからない方が長生きできるといわれるほど，医学は進んでいませんでした。日本の十九世紀の大奥の医者たちも，将軍が生ませた子どもおよそ三十人から，ようやく一人，成人させるまで育てることができた程度ですから（ほとんどがお化粧から来る鉛中毒と脚気による心臓障害での死亡でしたが)，お産と言う仕事を，きちんとこなす専門家が賢い女と呼ばれるのも当然だったでしょう。

フランス語では普通，形容詞は形容する名詞のあとに置かれます。だから，賢い女性だ，と言うときは，ファンム　サージュになります。

サージュが前に来るときは，職業としての今の助産師（助産婦，産婆）だけの意味になります。

今では「サージュ　ファンム」は助産師で，「ファンム　サージュ」は賢い女です。

（なだいなだ　作家・精神科医）

（編集部より）

精神科医にして作家の「なだいなだ」先生は，1984(昭和 59)年に『三言でいえば』（角川文庫 ©角川書店）という本を出されました。

この本の p.12－13 には「おふくろのこと」と題した記述があり，助産師だったお母様のことが，色々書かれています。

以下は，その中から一部を引用させて頂きました。

「おふくろは，ずっと産婆を業（なりわい）としていた。産婆という言葉には婆と言う字が入っているので嫌われていて，いまでは助産婦（編集部注：最近は助産師）という呼び名になっているが，ぼくの子供の頃には，家の入り口には産婆という大きな看板がかかっていた。うるし塗りの板に，大きく字が彫ってあった。おふくろは一生の間に，一万人以上の赤ん坊を取り上げただろう。(中略)近隣の人たちから，尊敬と信頼を得ていたようだ。さかごのお産には特別の技術を持っていて，正常位のお産より軽くすませた。

……私が医者だったら，論文を書いて出すところなんだけど。

と残念がっていたが，おふくろが，その方法をやるようになってから二十年ばかり後に，産婦人科の医者が，同じ方法を発見して論文を書いた。産婆の中には，ボクのおふくろばかりでなく，独自に同じ方法を考え出していたものが，他にもかなりあったらしい」

（以上，角川文庫『三言でいえば』から引用）